Interview

佐々木邦雄先生に聞く

# 自立した音楽家とは「自分で考えられる人」

**ピティナ・メディア委員の佐々木邦雄先生は、来年ピティナが主催する「音楽総合力UPワークショップ」のチーフとして、全体のガイド的な役割を担われます。ソルフェージュやアナリーゼといった「基礎」の技術が、指導に必要となる局面について、佐々木先生にお伺いしました。**

**佐々木邦雄先生**
東京芸大作曲科卒、作編曲家、ケーエスミュージック主宰、聖徳大学講師、当協会正会員、船橋KSMステーション代表

**――先生がお考えの「自立した音楽家」とは？**

一言で言うと「自分で考えられる人」ですね。何か1つを与えられたら、そこから自分なりの回答を導き出せる人。例えば、ある楽譜を与えられたら自分なりに、自信を持って弾くことができる人です。

楽譜といってもいろいろありますが、そのまま弾けばそこそこの形になるようなものでも、少なくともアナリーゼはしなくてはならない。また、楽譜にはメロディしか書かれていないようなものもあります。これなどは、総情報量の5%くらいしか書かれていないと言えるかもしれない。その5%から、音楽を膨らませて完成品にしていく力がなければいけないですね。さらにいえば、作曲家は「こんな雰囲気の音楽を作ってください」などと頼まれて音楽を作ることがあります。ピアノを弾く方々にも、何も書いてない五線紙に音符を書いていく楽しさを、経験してほしいと思います。できる範囲でいいんです。「できる」「できない」はふまえたうえで、自分なりの回答を出せるというのが、自立した人でしょう。

ピアノ指導でいうなら、生徒が「これ弾きたい！」と言って曲をもってきたとき、それが自分が習ったことのない曲だったとしても教えられるかどうか。私はそういう場合、まず生徒にその曲を弾いてもらうわけですが、生徒が演奏している間、頭はフル回転ですよ。瞬間的にアナリーゼしなきゃならないし、その生徒の力量も考えながら、どういうアドバイスができるのかを判断しなければなりません。私の場合初見でどんな難曲でも演奏できるというわけではないですから、相手が求めているものを、どうやって表現しようか、ということを考えます。

結局、何かを達成すれば自立できる、というような基準はないんです。凄い人は凄い。自分は自分なりで良いと思います。とはいえ、ピアノ指導者であれば、導入から初級レベルの曲なら、数回弾いてみて、その曲の狙い、演奏法、構成などだいたいのことは分かるようであって欲しいですね。指導すべきポイントを瞬時に見極めて、自分で演奏なり、言葉なりで表現できる力が必要だといえます。

**――来年行なわれるワークショップについてお聞かせください。**

日本では、音楽というのは一人ないし、ごく少ない人数の師匠から習うもので、あとは独力で勉強していくしかないというようなケースが多いのですが、来年行なうワークショップでは、アナリーゼや即興理論を深く習得された複数の先生方から、生きた情報を受け取ることができます。その中から、自分なりに必要なものを消化して、栄養として欲しいですね。ピアノ指導にも音楽の基礎力が必要です。ピアノを弾くといっても、その根底には音楽があるわけです。音楽をピアノで表現するわけですよね。この機会に音楽を「総合的に」とらえなおしてはいかがでしょうか！

## 糀場富美子先生

東京芸術大学作曲科卒、同大学院修。東京音楽大学作曲科教授、東京芸術大学講師、日本作曲家協議会・日本現代音楽協会会員、当協会評議員。

### ■第3回：楽典「楽典を演奏に活かすには」

**――自立した音楽家とは？**

1978年にフランスで、それまでのソルフェージュ教育から「フォルマシオン・ミュジカル、すなわち音楽家の基礎形成」と呼ばれる教育がはじまりました。楽譜を読んで、自分の力で考えて、音楽を構築し演奏ができる人を育てよう、ということになったのです。これにはソルフェージュ、和声学、音楽史などの基礎能力の充実が必要になります。それらの基礎能力をもとに、譜面を読み解き、演奏表現に活かしていく事が大切だという考えに基づいています。例えば大学等で学習する和声学では、ただ禁則を覚えて課題を解くことが目的ではなく、主にロマン派までの西洋音楽の音組織を把握して演奏に役立てるためにあります。また、音楽史も大切な基礎能力の一つだと思います。たとえばモーツァルトの時代のピアノは、現在のようなダンパーペダルは無かったということを知っていれば、その時代に書かれた曲とロマン派時代のピアノに触れて書かれた曲とはまったく違うはず、ということがわかります。そういった総合力をもっていることが、「自立」につながるのだと思います。

**――ワークショップの中ではどういった内容をお話されますか？**

佐々木邦雄先生の「そもそも楽典とは」という講座の後をうけて、楽典、アナリーゼなどを統合したフォルマシオン・ミュジカルの考え方に触れ、基礎能力充実の必要性と、それをどのように役立てるか、というお話をしたいと考えています。

## 秋山徹也先生

東京芸大卒、同大学院修／当協会正会員、文京アナリーゼステーション代表、指導者検定委員（中級グループ）

### ■第5回：アナリーゼ「インベンション・ソナチネ・ブルグミュラー」

**――先生の考える自立した音楽家とは？**

音楽的に自立するためには、自力でアナリーゼできる能力が必須と言えるでしょう。そのためには、個々の和音・転調先の調性などがもつ本来のイメージを掴み、こういう音を出すのが原則なのだなという、いわば「音楽の上での常識」をたくさん頭に入れていく必要があります。私は、特に和声法、曲の構成、歴史的な様式感を把握することが重要だと思っています。

**――ワークショップの中ではどういった内容をお話されますか？**

バッハのインベンション、ソナチネ、ブルグミュラーといった馴染み深い中級レベルの教本を題材にします。この中級レベルは、自立して音楽を勉強していくにあたってちょうどいい時期だと思うんですね。いろんなことを学び自分で考えて音楽をつくっていくことができる、その基礎をつくる重要な時期にあたりますので、これらを教材としてしっかりと丁寧に楽曲分析し、同時に楽曲分析に必要な学習事項を整理したいと思います。

## 春畑セロリ先生

作・編曲家　東京芸術大学作曲科卒。舞台、映像、イベントの音楽制作や、出版のための作編曲、執筆、CD・音楽ソフトのプロデュースなどを数多く手がける。

### ■第9回：実践理論「理論は感性の見方」

**――自立した音楽家とは？**

「音楽で飯が食えているか」とか「お客が呼べるか」というとらえかたもあると思いますが、「自分自身で音楽表現が作れるか」という方向で考えることもできます。

それにしても、いつの時点で「自立した音楽家」といえるのでしょうね！自分が納得すれば？他人がそのように評価するから？実はゴールがないんですね。だからゴールに至る道も確定できない。確定が難しいからこそ、それを探すことが演奏、表現活動になるのかなという気がします。

**――ワークショップの中ではどういった内容をお話されますか？**

音楽表現に必要なことには、演奏法や理論的背景といった広い意味での「テクニック」と、感情、感性といった「パッション」があります。この二つは切り離せませんけれども、テクニックの成長がパッションを導くのではなく、パッションがより高いテクニックを求めるんです。つまり、パッションの成長が、テクニックを引き上げるのですね。

来年の音楽総合力UPワークショップでは「理論は感性の味方」というタイトルでお話します。ピアノを指導される方々にお伝えするものですので、演奏表現に直結する内容で。「この和音に感動しろ」ではなくて、演奏する人の想いを実現する助けとなるような「理論」のあり方を紹介したいと思います。

## 多喜靖美先生

桐朋学園大卒、当協会評議員、指導者検定委員会アンサンブルグループリーダー、ジャスミンKOMAEステーション代表、昭和音楽大学非常勤講師

### ■第10回：演奏への応用「自分で考え、演奏するには」

**――先生の考える自立した音楽家とは？**

クラシックの世界では、やはり先ず楽譜がありきですよね。ですから、楽譜をよく読む、そしてその上でどういう演奏をするか、何を聴き手に伝えるかということを自力で考えられるということだと思います。

そのために、私が特にお薦めしたいのは、「もっとピアノで遊ぶ」ということ。レッスンで与えられた曲以外でも、いろんな楽譜を取り出してきて弾いてみる。ピアノ曲以外の作品も弾いてみる。ある時には楽譜なしで好き勝手に弾いてみる、等々。色々な楽譜に親しむことで、そこから多くの情報を読み取れるようになり、新たな解釈を生み出す力も養われる。最近では、生徒たちにも積極的に「遊び弾きのススメ」をしていますよ。音楽の幅がぐんと広がる有効な方法のひとつだと思っています。

**――ワークショップの中ではどういった内容をお話されますか？**

楽譜は、お芝居の台本のようなもの。その台本の中に隠されている意味や意図を様々な方向から読み取っていくこと、それをどのように演出をしていくかということを考えていきましょう。私は、このワークショップの最後の回なので、皆さんの身近な曲を題材にどんな楽譜の読み方ができるのか、どんな演奏ができるのかという実践をお話しできればと思います。